

## パーキスタンに於けるパンジャービー語話者と ウルドゥー語

萩 田 博

パーキスタン・パンジャーブにおける言語問題、特にハンジャービー語を州の公用語とし、教育、行政などの分野での使用を義務化させようとする運動については C. Shackle や Tariq Rahman などの論考によってその歴史的展開、問題点などが明らかにされてきた。彼等の分析ではこの運動に少なからず影響を及ぼしたと考えられる進歩主義文学運動に対する論究があまりなされていない。そこで小論ではパンジャービー語運動に進歩主義文学運動が果たした思想的影響などに言及しながら、この運動について論じることにした。

インド・パーキスタン分離独立後、進歩主義文学運動は両国に分かれて、その活動を続けた。この際にパーキスタン側では、国語問題の論争の中でウルドゥー語と他の地方語（パンジャービー語、シンディー語、パシュトー語、パローチー語など）との関係が問題となった。この点で注目したいのが、1949年に分離独立後初めて開催されたパーキスタン進歩主義作家会議である。この会議で採択された宣言書の中で、地方語あるいはその文学に関して次のように述べられている。

「今に至るまで、我々は様々な民族 (qaumiyat) の文学、つまり シンディー、パシュトー、ベンガル、パンジャービー文学などに誠に無頓着なままである。それらの言語の古典、現代文学を熟読し、それから恩恵を受けることは我々の義務である。我々はこれらの言語の文学者たちを自分たちの運動に加え、これらの言語も自らの思想の表現手段とすることを宣言する。このようにすれば、我々は諸言語の存続と発展に参加するのみにとどまらず、大衆の感情や考え、そして彼らの生活上の諸問題を良い方法で理解し、自らの著述で提出することが出来るだろう」<sup>2)</sup>

ここでは進歩主義運動に関わった文学者の大半がウルドゥー語を表現手段としてきたことが明らかにされているが、後述するようにこの状況は大きな変化を見なかった。また宣言書には盛り込まれていないが、言語問題に関して次のような方針が打ち出された。

「言語について会議は1つの科学的な視点を提出した。すなわち、パーキスタンにおける教育は、パーキスタンの様々な民族 (qumiyat) すわちベンガル、シンディー、パンジャービー、パローチー民族の言語で為され、これらすべての言語にパーキスタンの州の言語 (riyāsati zabān) としての地位が与えられ、ウルドゥー語とともにこれらの言語の発展・普及のための措置が講じられるように、ということである」<sup>3)</sup>

この会議にシャリーフ・クンジャーヒー Sharif Kunjāhī (1915-) やアフマド・ラーヒー Ahmad Rāhī (1923-) など後にパンジャービー語運動で重要な役割を果たすことになる詩人が参加していることは注目に値する。彼らは分離独立以前から進歩主義文学の影響を受け、パンジャービー語による詩作を早くからおこなっていた。パンジャービー語運動で中心的な役割を果たしているシャフカト・タンヴィール・ミルザー Shafqat Tanvīr Mirzā (1932-) は進歩主義作家がパンジャービー文学に対して好意的であったとして、この時代の進歩主義運動を肯定的に評価している<sup>4)</sup> 一方、1986年に開催された世界パンジャービー語会議 ‘Ālami Panjābī Kānfarans の宣言書では「1974年の以降、パーキスタンのパンジャービー文学の展開はこの遺産 (進歩主義運動) と結びついていた。しかし我々はそれを維持しながら歩んで行くことは出来なかった」<sup>5)</sup>と述べられており、進歩主義文学運動の内部でパンジャービー語運動が進んでいったわけではなかったことがわかる。例えばパンジャービー語を母語とし、進歩主義文学運動に関わったウルドゥー文学者でこの時代以降パンジャービー文学へと移った文学者の数は多くない。進歩主義運動に影響を受けた詩人ファイズ・アフマド・ファイズは主にウルドゥー語で創作活動を続けたが、それに対して「進歩主義運動の失敗の大きな原因はこの土地の言葉ではない言語で文学創作を行ったことであつたし、今でもそうである」と批判するものもいる。<sup>6)</sup> ファイズ自身はハンジャービー語ではあまり詩作を行わなかった理由として自分がウルドゥー語やウルドゥー詩の伝統に通暁してはいても、パンジャービー語やその詩的伝統に十分に精通しておらず、自分がウルドゥー詩にのみ適合するような知性や頭の構造を持つようになったと述べている。<sup>7)</sup> シャリーフ・クンジャーヒーやアフマド・ラーヒーは自由詩 (nazm) の分野で活躍したが、これはファイズの言うような詩的伝統をあまり必要としない分野だったからかもしれない。ミルザーは「ウルドゥーを通じて名声を得た知識人や作家はパンジャープの大衆を無視し、ナショナル・イメージを深し求めようとした。彼らの中で言語的に階級を下げてパンジャープの大衆、パンジャービー語、そしてその力強い

文学と伝統を自らと同一視する用意のある者はいなかった」<sup>9)</sup>と述べているが、これは〈大衆と自己の同一化〉という理念を保持していたかどうかと言う問題をのぞけば、多くの進歩主義作家にも当てはまることであった。こうした背景には理念の有無といった視点からではなく、後に触れるように、パンジャービー語の標準的散文体が未だに確立されていないことにも大きな原因があるように思われる。

さて、1950年代に入ると、文学団体の設立や雑誌発刊という形でパンジャービー語運動が展開するようになる。そこでまず主な文学団体と、雑誌について述べることにする。1951年にPak Panjabi Leagueが設立され、それを背景にして同年9月にパンジャービー語の最初の月刊誌『パンジャービー』Panjābīが発刊された。1954年にはPak Panjabi Leagueを受け継ぐ形でPanjabi Cultural Societyが設立されている。これらにはアブドゥル・マジード・サーリク ‘Abdul Majīd Sālik (1895-1959) とファキール・ムハンマド・ファキール Faqīr Muḥammad Faqīr が関与していた。サーリク自身はパンジャービー語の文学的、文化的発展に関心を持っており、ウルドゥー語の国語化運動には反対していなかった。ミルザーは月刊誌『パンジャービー』について、「パンジャービー語で散文を書く、というそれまで存在しなかったことを多くの者に鼓舞した」という肯定的な評価とともに、「執筆する際に、彼らはすでにウルドゥー語に汚染された都市のパンジャービー語をまさにその手本とした」と述べ、標準的散文体のあり方に対して問題提起を行っている。<sup>9)</sup>このように言語運動の目標、方法などの点でこの時代に早くも内部分裂の萌芽が見られるようになる。そして、サーリクのようにウルドゥー語との協調的発展を望む人々とは別に、思想的にも左翼的で、言語運動でもウルドゥー語に対して批判的なグループが台頭した。そのグループが1957年に設立したのがパンジャービー協会 Panjābī Majlis だった。そしてその機関誌的なものとして文芸雑誌『五つの河』Panj Daryāが発刊されることになった。この団体はアイユブ政権下、政治団体としてすぐにその活動を禁止された。このような状況下、ミルザーが中心となって1962年に設立したのがシャー・フサイン協会 Majlis Shāh Ḥusain であった。著名なパンジャーブのスーフィー詩人の名を冠したこの団体は出版活動もさることながら、シャー・フサインのウルス (命日) に、様々な文化行事を行い、パンジャーブの大衆との接触をはかった。これは進歩主義運動が示した路線に重なるものと言えよう。『パンジャービー文学』Panjābī Adab は1960年に創刊されたが、これは『五つの河』とは協調関係にある雑誌であった。活動を禁止されたパンジャービー・マジュリスを継承する形となったのがパンジャービー文学協会 Panjābī

Adabī Sangat であり、1963年に設立された。1975年にはパンジャービー文学院 Panjābī Adabī Bord が設立され、『パンジャービー文学』を継承する形で同名の雑誌が同院から刊行されている。

ミルザーが『パンジャービー』の散文体に対して異議を唱えたことは先に述べたが、ナジュム・フサイン・サイヤド Najm Husain Sayyid (1927-) などのパンジャービー語運動の急進派は C. Shackle が指摘しているように<sup>10)</sup>、パーキスタン・パンジャープの中央部付近のパンジャービー語を標準語として散文体の確立をすすめようとしており、前述の『パンジャービー文学』や1989年に創刊された月刊誌『母語』Māñ Bolī はこうした運動の中核となっている。この背景にはムスリムによるパンジャービー語の多くの古典文学作品がこの地域で執筆されたということと、この地域のパンジャービー語に対するウルドゥー語の影響が少ないという理由がある。<sup>11)</sup>ウルドゥー語の影響を受けて変化しつつある都市のパンジャービー語話者にとってこうした散文体は了解性を欠くものとなっている。それは急進派が理念の1つとして抱いている文学者と大衆とのアイデンティティの一致というものとは矛盾するものになってしまうと言えよう。

パーキスタン建国の理念であるヒンドゥー・ムスリム二民族論から派生したパーキスタン人としてのアイデンティティの問題、多民族国家であるという現実から生じた民族主義的なアイデンティティの問題が分離の独立以後、言語、文学の領域でも論議されてきた。パンジャープのムスリムが分離独立以前からウルドゥー語・文学に大きな文化的影響を受け、そしてその発展に大きく寄与してきた歴史的経緯がこの地域の言語問題をより複雑なものにしたといえるであろう。そして進歩主義文学運動が1949年に提出した言語問題に関する理念を継承しているのが急進的パンジャービー語運動者と言えるのではないだろうか。

- 
- 1) Shackle, Christopher. "Punjabi in Lahore", *Modern Asian Studies* 4 : 3 : London, 1970. pp. 239-67., 同. "Language and Cultural Identity in Pakistan Punjab", in Krishna, Gopal. (ed.) *Contributions to South Asian Studies*. Delhi, 1979. pp.137-60., Rahman, Tariq. *Language and Politics in Pakistan*. Karachi : Oxford University Press. 1996. などを参照されたい。
  - 2) "Manshūr", *Saverā*7-8, Lahore, Nayā Idāra, 1949? p. 30
  - 3) "Tasaqqī Adīboñ ki Kānfarans", *ibid.*, p245
  - 4) Mirza, Shafqat Tanvir. *Resistance in Punjabi Literature*. Lahore, Sang-e-Meel Publications, 1992. p.179
  - 5) "I'rān nāma", in Qaisar, Iqbāl. Pal, Jamil Aḥmad. (eds.) *Ālamī Panjābī Kānfarans*, Lāhaur, Kalāsik, 1986. p.442

( 22 ) パーキスターンに於けるパンジャービー語話者とウルドゥー語 (萩 田)

- 6) Ḥaidar, Saiyyd 'Imrān., "Faiz Aḥmad Faiz", *Lahirān* 26 ; 6-7 : , Lāhaur, Lahirān, 1990. p. 123
- 7) Chaudhrī, Nuṣrat, "Faiz se ek guftgū", in Ṭāhir Tonsvī (ed.) *Faiz ki Taxliqī Shaxsiyat*, Lāhaur, Sang-e Mil Pablikeshanz, 1989. p. 372
- 8) Mirzā, *ibid.*, p.175
- 9) *ibid.* pp.179-80
- 10) Shackle, 1979., *ibid.* p.152
- 11) Mirzā, *ibid.* p.180-181

〈キーワード〉 ウルドゥー語, パンジャービー語, 進歩主義運動

(東京外国語大学講師)

### 新刊紹介

小倉泰著

## インド世界の空間構造

——ヒンドゥー寺院のシンボリズム——

A5判・306頁・定価8,000円

春秋社・平成11年5月20日